

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

新海誠の作り出す世界には常に距離が存在する。そして、キャラクターたちはその絶妙な距離に翻弄される。それは時に何光年も離れた宇宙の端と端であったり、並行宇宙であったり、栃木と鹿児島であったり、あるいは現世と常世であったりする。その距離が生み出す孤独やすれ違い、そして距離を克服した時のカタルシス。この届きそうで届かない距離になぜ私たちは魅了されるのだろうか？

私たちは24時間繋がりあった現代を生活している。世の中は安全で便利で快適で、私たちは距離も孤独も克服したようにも見える。しかし他方で、大量に行き交う情報、加速していくメディアのスピードにどこか置き去りにされているような感覚もある。全てが繋がりあった社会で、私たちはどこか寂しく孤独な存在になりつつある。

孤独を感じ生きる私たちに新海誠はヒントを与えてくれる。彼のキャラクターは届かない距離に遭遇した時、記憶に救いを求める。『ほしのこえ』の美加子は、互いに好意を寄せ合う昇と8光年以上離れた距離に引き裂かれた。孤独に押しつぶされかけた時、彼女は少し未来の自分と遭遇する。彼女は少し先の自分の記憶に励まされ、前を向いて進むことを決意する。「記憶」によって距離の生み出す孤独を克服するというプロットは、彼の作品を徹底して登場する。『雲のむこう、約束の場所』では過去の約束を叶えることが、『星を追う子ども』では自分の生涯の記憶を乗せた歌が、届かない距離を超えるトリガーとなった。最新作『すずめの戸締まり』でも、死者の記憶を想像し心に留めることが現世と常世を正しく繋ぎ直す鍵となっている。

物事を正しく記憶する。それは個々人の孤独を克服することにとどまらず、社会にとっても今必要なことだと感じる。哲学者の東浩紀は、『テーマパーク化する地球』の中で、日本人は忘れっぽい民族であると指摘している。そしてその「忘れっぽさ」が社会に歪みをもたらしているという。

例えば彼は震災後の福島において、日本人にとって復興とは単に災害が起こる前の状態に戻すこと、すなわち「なかったことにすること」ではないかという問題を提起した。私たちの生きる社会では復興の問題は、原発賛成派と反対

派の対立のような政治的な問題、あるいは経済合理性の問題に矮小化される。「合理性は無駄の忘却を強いる」という彼の言葉のように、資本が支配する社会では、経済的な価値の生み出さない死者の記憶や残された人の思いといったものは忘れ去られてしまう。

私は新海誠の世界にも、同じ問題提起がなされていると感じた。『すずめの戸締まり』では人の心の離れた場所に後ろ戸が開く。この設定を通じて、死者を悼むこと、物事を正しく記憶することの大切さを訴えかける。

本稿では新海誠作品に一貫して登場する「距離」というモチーフ、そしてそれに向き合うための「記憶」について考察する。それを通じて私たちが「距離」の生み出す孤独とどう向き合い、物事をどう「記憶」すれば良いかのヒントを探る。

1-2 本稿の構成

本稿は第1章から第4章までで構成される。第1章では序論として研究の背景や目的、構成について説明する。第2章では新海誠作品に登場する「距離」について、第3章では「記憶」について論じる。第2・3章はそれぞれ2つの節によって構成される。2章ともに、1つ目の節は商業作品デビュー作である『ほしのこえ』から最新作『すずめの戸締まり』において、上述のテーマがどのような形で現れたかについて時系列に沿って整理する。2つ目の節では整理した事実をもとに、それらのテーマが持つ意味や、作品を重ねるごとに各テーマがどのように変化したかなどの示唆について考察する。第4章では結論として研究の成果や意義、残された課題についてまとめる。

2. 「距離」について

2-1 新海誠作品に登場する「距離」

本節では新海誠作品に一貫して描かれる「距離」というモチーフが、商業デビュー作『ほしのこえ』から最新作『すずめの戸締まり』までどのように登場したかを時系列に沿って整理する。

『ほしのこえ』

『ほしのこえ』で登場するのは物理的な距離である。互いに想い合い、同じ高校への進学を望んでいた美加子と昇は、美加子の国際連合宇宙軍調査隊への

抜擢を機に宇宙と地球に引き離される。その距離を強調するのが二人の間で交わされるメールだ。美加子が宇宙の奥深くへと進むにつれメールの返信が届くまでの時間も数日、数週間と引き伸ばされてゆく。最終的に 8.6 光年離れた二人の距離では、もはやメールはノイズにまみれ、満足には届かなかった。

物理的距離が離れると同時に、彼らの時間にも距離が生まれるのがこの作品の特徴だ。なぜなら宇宙の数光年というスケール感のもとでは、距離は時間そのものであるからだ。中学生の美加子が 8 光年先のタルシアンと戦う間に、昇は 24 歳になる。それを象徴するように、美加子は中学校の制服を着たまま調査に参加し続ける。これにより、大人へと成長していく昇との対比が際立つ。

また新海作品に数多く登場する、突然降り出す雨や踏切といった男女の関係のすれ違いを暗示するような描写も今作から登場しており、新海誠ののちの作品群の基盤となるような作品と言える。

『雲のむこう、約束の場所』

この作品では、ヒロインの佐由理が宇宙の見る夢—すなわち平行宇宙の荒廃した世界に閉じ込められる。物理的にはすぐ近くにいる男女が、届かない「距離」を感じるのがこの作品の特徴と言える。また今作では以降の新海作品で繰り返し登場する「夢の中で男女が出会う」というモチーフが初めて登場する。新海誠自身が「得意なものは繰り返し使う」と述べているように、現実世界では届かない距離にいる二人が、夢で邂逅するというモチーフは様々な作品で重要な役割を果たしてゆく。

ヒロインの佐由理が劇中で朗読しているのは宮沢賢治『春と修羅』に収められている『永訣の朝』という作品だ。『雲のむこう、約束の場所』の平行宇宙というモチーフは、『永訣の朝』に登場する「銀河や太陽 気圏と呼ばれた世界 (= 宮沢独特の四次元世界という宇宙観を表す言葉)」から着想されたものであると推測できる。日本の神話や世界の名作小説 (キャッチャー・イン・ザ・ライなど) など、着想を得た作品を劇中に登場させる演出は今作から始まったものと言える。

『秒速 5 センチメートル』

過去 2 作品とは異なり SF 的な設定は取り除かれ、現実世界における「届かない距離」が描かれる。東京の小学校で心を通わせていた貴樹と明里は、明里の

栃木への転校を機に引き裂かれることになる。東京と栃木。過去 2 作品の 8.6 光年や平行宇宙と比べると相対的には近い距離である。しかし携帯電話のない時代、子供にとっての東京と栃木は決定的に遠い距離であり、現実的な分より切実な遠さを感じられる。

『秒速 5 センチメートル』は貴樹と明里の物理的な距離の物語であると同時に、もう一人のヒロイン・花苗と貴樹の心の距離の物語でもある。中学 2 年生の時東京から鹿児島へと引っ越した貴樹は、そこで同級生の少女・花苗に想いを寄せられる。しかし貴樹の心は常に明里のもとにあり、登下校を共にする花苗と貴樹の心の距離は、ある意味で貴樹と明里の間にある距離よりも遠い。「1000 回メールをしても、心は 1 センチくらいしか近づけなかった」というセリフに集約されるように、空間的な距離と精神的な距離の対比が今作の切なさを際立たせている。

大雪で停まる列車、遠くを目指すロケットなど、劇中に登場する装置が登場人物の距離のメタファーとして現れる演出も今作の特徴と言える。

『星を追う子ども』

今作描かれるのは、後の『すずめの戸締まり』につながるような生者と死者の距離だ。主人公のアスナは地下世界・アガルタから来た少年・シュンと出会う。また会うことを約束した二人だったが、シュンは翌日遺体で発見される。死を受け入れられないアスナは、同じく妻の死を受け入れられない教師・森崎とともにアガルタを目指す。

この作品が他の作品と決定的に違うのは、他作品が男女の間にまたがる双方向の距離を描いたものであるのに対して、今作は死者に対する生者の一方的な距離である点だ。アガルタの最果てには、死者を生き返らせられる「生死の門」があるとされ、アスナと森崎はそこを目指す。しかし世界の最果て「フィニス・テラ」に至って、アスナはシュンを生き返らせたいと思っているわけではなく、ただ寂しさを埋めるために旅をしていたことに気づく。このことが示唆するのは、アスナにとって重要なのは実際にシュンが生き返るかどうかではなく、彼の死に対して自分がどういう態度をとるか、どのような意味づけを行うかであったということだ。

また今作は以降の作品群で物語の下敷きとなる日本神話が初めて登場する。アスナと森崎の旅は、劇中繰り返し言及される『古事記』のイザナギの旅の反

復でもある。神話の結末—すなわちイザナミの蘇生というイザナギの目的が成就しないことは物語の序盤であらかじめ示される。ではこの喪失の予感に溢れた旅が何を意味するのか。それについては次章で詳しく考えるが、ある種私小説のようなフォーマットで「距離」について物語を完成させた『秒速 5 センチメートル』の次の作品で、神話的なアプローチを行なったことは見逃せない。彼は「距離」という問題、時代や国を超えた普遍性を持つことを神話的なアプローチを取ることによって観客に突きつけるのだ。

『言の葉の庭』

靴職人を目指す高校生の孝雄は、雨の日の新宿御苑でビールを飲む女性・雪野に出会う。お互い心休まるひと時を過ごし惹かれ合う二人だが、彼らの間には高校生と大人、12年の歳の差という距離が広がる。

加えて今作は、雪野による万葉集の短歌の引用が重要な意味を持つ。「雷神の少し響みて さし曇り 雨も降らぬか きみを留めむ。」これは、「雷が鳴り響き雨でも降ってくれないであろうか そうすれば、あなたをこの場に引き止めることができるのに」という意の歌であり、雨の降る日しか会えない二人の届きそうで届かない微妙な距離を暗示している。

さらに二人の関係に決定的な影響を与えるのが、二人が同じ学校の教師と生徒という関係であったことだ。梅雨が明けてしばらく雪野に会えなくなった孝雄は、彼女が学校の古文の教師だったことを知る。日本社会において教師と生徒の恋愛はタブーであり、常識や世間の目が二人の間に社会的な距離を生み出す。

一方で、この作品は新海誠の作品群の1つの転換点とも言える。というのも、これまでの作品は二人の間の届かない距離とどう向き合うかを描いたものであったのに対し、今作では最終的に二人の距離が縮まることを暗示するものであるからだ。季節が変わって冬になると地元の四国で教師に復帰した雪野から手紙が届くようになる。靴職人という夢が象徴するように、孝雄は梅雨の新宿御苑で自分たちは歩く練習をしていたのだと追想し、もっと遠くまで歩けるようになったら高知にいる彼女のもとに会いに行くことを決意する。こうした未来に希望を持たせるような物語の結末はこれまでの新海誠作品では珍しかった。しかし今作以降の『君の名は。』『天気の子』『すずめの戸締まり』はいずれも喪失を克服した形で物語が締めくくられる。その意味で、今作は新海誠の1つの

転換点である。

『君の名は。』

『君の名は。』には大きな距離の仕掛けがある。この作品は告知の段階から男女の入れ替わりの物語であることが繰り返し強調されてきた。飛騨と東京、2つの離れた地域に住む男女の距離の物語。入れ替わりというギミックはあれど、そのプロットは『秒速5センチメートル』などに共通するものである。

しかし『君の名は。』を国民的映画たらしめたのは、実は瀧と三葉の間には3年という時間の差があったこと、そして三葉は三年前の隕石の落下によって死亡していたという仕掛けである。二人の間には空間的な距離以上に大きな、時間の距離と生死の壁が存在していたのだ。

この作品は、東宝とタッグを組み新海誠が全国デビューを飾った作品であるとともに、『秒速5センチメートル』で完成させた私小説的なフォーマットと空間的な距離の物語、そして『星を追う子ども』で踏み込んだ生者と死者の距離の物語が綺麗なストーリーラインでまとめられた彼の集大成と言えるだろう。過去の5つの作品で繰り返し挑んだ男女の「距離」の物語は『君の名は。』で1つの完成形を見せたと言える。

また今作では新海誠の社会性の意識の芽生えが見受けられる。これまでの作品が個人間の関係に閉じたものであったのに対して、今作は「セカイ系」と呼ばれるように、男女の関係が社会全体の問題に直接関与するようなプロットになっている。こうしたセカイ系的な世界観は後の『天気の子』『すずめの戸締まり』にも引き継がれていく。

『天気の子』

先述の通り、『君の名は。』にて新海の男女の距離の探求は1つの完成を見せた。『天気の子』、そして次作『すずめの戸締まり』に共通して描かれるのは個人と社会の「距離」の問題である。

高校一年生の帆高は家出をして東京に来て、そこで徹底的に社会との距離を見せつけられる。なぜなら、東京は資本と合理性の巨大なシステムによって支配されており、その中で家出少年であり身分を持たない帆高はシステムのイレギュラー、排除されるべき存在だからだ。東京で帆高が会うのも、システムから距離を置いた、あるいは距離を置かれた逸脱者たちである。ヒロインの陽

菜は、中学生でありながらアルバイトをしており、生きるために売春に走ろうとする。帆高に手を差し伸べた須賀も、どこか胡散臭さの漂うオカルト雑誌の記事を執筆する。

今作においては本来人々の生活を守り、青少年を助け、街の景観を守るために存在する合理的な社会システムが、合理的であることが自己目的化され担うべき役割を果たせていないことが強調される。実際家出少年である帆高を助けるのは、健全な社会システムから一定の距離を置いた辺縁に位置する、ネットカフェ、ラブホテル、オカルト雑誌のような存在である。

『すずめの戸締まり』

『すずめの戸締まり』で描かれるのは現世と常世、生者と死者の間にまたがる「距離」である。同様に生者と死者を描いた『星を追う子ども』と異なるのは、『星を追う子ども』が男女の個人間の喪失の体験を描いたのに対し、今作がそれに加えて日本社会全体の喪失とどう向き合うかを描いた物である点だ。この作品は母を震災で失ったすずめの物語であると同時に、成熟し老年期に差し掛かった日本という国が、過疎化で失われた場所や災害で失われた命を悼む物語でもある。

『すずめの戸締まり』が投げかけるのは、日本という巨大な社会システムがシステムから疎外された廃墟や、災害で失われた命・記憶とどう向き合うべきかという問いである。またすずめが東京で靴をなくして歩いた際冷ややかな目線を浴びせられる描写は、前作の『天気の子』で提起された社会システムの問題に重なる。

『君の名は。』で萌芽し『天気の子』で語られた社会への目配せを引き継ぎ、また『星を追う子ども』の文脈を継承した今作は、ある意味必然的に生まれた新海誠らしい作品と言える。実際、映画の広告では「新海誠の集大成」というような文言も見受けられた。一方で、今作では『ほしのこえ』以降語られ続けた、男女の距離、関係の機微という描写がほとんど見られないという特徴もある。確かに、すずめは閉じ師の少年・草太に恋心を抱く。そして、関係が構築される前に喪失を味わうというモチーフはこれまでの作品と共通するものである。しかし他方で、すずめは一目惚れという形で草太に惹かれ、男女の関係が積み上げられてゆく描写がほとんどないという点で異色の作品とも言える。これについて作者は『新海誠本』の中で、「運命の赤い糸のような物語は、今の自

分には当時（『君の名は。』を製作した際）と同じ強度では作ることはできません」と述べている。ⁱこのことは新海誠の関心が男女の「距離」から個人と社会の「距離」へと変化を遂げたことを示唆している。

2-2 新海誠に現れた2つの変化

前節では新海誠作品の中で「距離」というモチーフがどのような形で現れたかを時系列に沿って整理した。上記の整理から、新海誠には2つの変化が生じたとわかる。

1つ目の変化は「喪失から回復へ」という変化である。先述のように、この変化は『言の葉の庭』で兆しを見せ、『君の名は。』で顕著に現れる。それまでの作品を見てきたファンにとって新海誠は喪失の悲しみを描く作家であった。『ほしのこえ』では、絶対的な距離を前にした昇は心を硬くし、揺るがない自分の人生を生きることを決意する。『星を追う子ども』では、死は生きることの一部であり、死をありのまま、自然の流れの一部として受け入れることが肯定された。

しかし、『言の葉の庭』以降の作品である『君の名は。』では、死者は蘇りその回復のカタルシスに幅広い世代の人が魅了された。アニメ評論家の藤津亮の言葉を借りれば、『ほしのこえ』から『星を追う子ども』までが私小説的なフォーマットに基づいたモノローグ的な作品であったのに対し、死者が蘇り「君の名は」と問うダイアログ的な作品である。ⁱⁱ

このような変化を遂げた背景には『君の名は。』の東宝とタッグがあると考えられる。今作は売れっ子の川村元気をプロデューサーに迎え、全国約300館という大規模な興行を行った。それまで個人製作からキャリアをスタートし自分が描きたいものを自由に描いていた新海誠が、社会に開かれ、その中で自分の作家性を出すことを求められた。その過程で東日本大震災も経験した彼は、物語によって人々を救うことを目指したのではないだろうか。

また「喪失から回復へ」というキーワードは、新海誠の敬愛する村上春樹の作品の変遷を想起させる。彼も阪神淡路大震災を経験し、喪失の物語からの転換を遂げた。ここでは詳しい比較は割愛するが、その類似も興味深い。

2つ目の変化は「個人から社会へ」である。それまで男女の間の「距離」、そのすれ違いを描いてきた新海は、『君の名は。』以降明確に社会への関心を強める。新海誠は講演会「『天気の子』—物語の起点—」において、「作るべき映画

を作ることができた、と思えるようになりました。”正しくない物語”を作りたいという気持ちが強かったんです。世界を救わない物語を作りたい、と。」と述べている。そして「個人から社会へ」と舵を切れた理由について「『君の名は。』がなければ、こういう内容の映画を作ろうとは思わなかったと思います。『君の名は。』で今までとはケタの違う数の観客と出会うことができ『この映画が好きだ』とたくさんの人に言ってもらえた。この観客の“ベース”があれば、少し大胆なことができるんじゃないかと思ったんです」と語る。ⁱⁱⁱ新海誠は『君の名は。』での大ヒットによって彼は予算や技術、ヒットへのプレッシャーといった制約から解放され、本当に作りたいと思える作品を作ることができるようになったのだ。

また彼は SNS 全盛の時代に登場した作家であることも見逃せない。これまで映画監督にとって、観客の反応を知る方法は映画批評といった一部のチャンネルに限られていた。しかし、新海誠は SNS で常に観客の反応に触れることができ、またそれによって自分を成長させようという柔軟さを持つ。「逆にもっと批判されるような映画を作りたいと思切ることができたんです。帆高が社会からちょっとずつ外れていってしまう話で、道徳的ではない。見ようによっては反社会的な物語だと見られる要素も含んだ作品。でも『自分がやりたいのはこっちなんだ』と思切ることができたのは『君の名は。』で受けた批判があったからこそです。批判は、痛みはあるんですが、同時にやりたいことの輪郭を教えてくれるんです」という彼の言葉は彼の特徴を明確に表している。

3. 「記憶」について

3-1 新海誠作品に登場する「記憶」

第 1 章でも述べたように、新海誠の世界に登場するキャラクターたちは「距離」の生み出す孤独に遭遇した際、「記憶」に救いを求める。本節では第 2 章で行った区分に基づき、『ほしのこえ』から『星を追う子ども』までを前期、『言の葉の庭』以降を後期作品として、それぞれ「記憶」がどのように登場し、どのような役割を果たしたかを整理する。

前期作品における「記憶」

第 2 章で、新海誠の前期作品ではモノローグ的で喪失の予感に満ちた世界観や男女の閉ざされた関係などの特徴を見ることができることを確認した。前期

作品に登場する「記憶」はこうした男女の関係における喪失と向き合い、それを克服するヒントとして登場する。

『ほしのこえ』で8.6光年という距離に押しつぶされそうになった美加子が思い出すのは少し未来の自分の記憶である。彼女は大人になるためには痛みが必要であることを告げ、奮起した美加子はタルシス遺跡に似た居住跡を見つける。

『雲のむこう、約束の場所』で平行宇宙に閉ざされた佐由理を救うのは、蝦夷という場所に建てられた高い塔まで一緒に飛ぶという約束の記憶だ。しかし同時に、佐由理は記憶の喪失も経験する。浩紀が佐由理を乗せ、飛行機で塔まで飛ぶ約束を果たすことで佐由理は目覚める。しかし、同時に彼女はこれまで募らせていた浩紀への思いの記憶を全て失ってしまう。

『星を追う子ども』では、地下世界・アガルタと長野という距離を「自分の生涯の記憶を乗せた歌」によって超える。アガルタの生物・ケツァルトルには死ぬ間際に自分の生涯の記憶を乗せた歌を歌う習性があり、アガルタの少年・シュンもそれに習って歌を歌う。歌によって思い出されるシュンの記憶はアスナを勇気付け、彼の死を受け入れる手助けとなる。

後期作品における「記憶」

これまでに後期作品、特に『君の名は。』以降の3作品は「距離」を回復して対話するダイアログ的な作品であり、また社会に対して開かれたものであることを確認した。後期作品においては、「記憶」が果たす役割は単に「距離」の生み出す孤独を受け入れることだけでなく、男女の、あるいは主人公と社会との「距離」を回復し結び直すことだった。

『君の名は。』では三葉の残した口噛み酒が重要な役割を果たす。口噛み酒は三葉と瀧の入れ替わりの記憶の象徴である。口噛み酒を飲むことによって男女の間に存在していた時間の壁、そして生死の壁は取り払われ二人は「距離」を回復する。同時に、口噛み酒は宮水神社が代々継承してきた災害の記憶の継承の象徴でもある。宮水神社では、200年前に起こったとされる「繭五郎の大火」以来文献が消失して伝統の「意味」は喪われてしまった。しかし形式だけでも「記憶」を伝承し続けたことが、隕石の災害を防ぎ糸守町の住民を救う助けとなる。

『天気の子』ではハンバーガーの記憶が帆高を導く。家出少年の帆高は東京に来た当初仕事に就くことができず身分を持たない、いわば社会から

の逸脱者であった。しかしマクドナルドでスープだけを飲んでいて帆高を見かねた陽菜が、店に内緒で帆高にハンバーガーをご馳走する。彼女のくれたハンバーガーによって勇気付けられた帆高は職を探すことを決意する。本来大量消費され忘れられる存在である1つのハンバーガーの記憶によって、帆高は社会の中に自らを位置付け、それが陽菜との距離を縮めるきっかけにもなるのだ。

『すずめの戸締まり』は「記憶」とどう向き合うかという物語である。先述の通り、この作品は「人の記憶の失われた場所に後ろ戸は開く」という設定によって日本という社会システムが、合理性によって忘却された廃墟や災害の痕跡とどう向き合うべきかを問いかける。その1つの解として、すずめは失われた場所の記憶や、災害で失われた人々に存在した無数の「ってきます」という言葉を胸に留めるという行動をとる。

3-2 「記憶」についての考察

今節では前の節で整理した内容を踏まえ、「前期から後期にかけて記憶の位置付けがどのように変化したか」、「記憶と同時に描かれる忘却について」という2つの論点で考察する。

前期から後期にかけての変化

先述のように、『君の名は。』以降の作品では「記憶」の果たす役割が大きく変化している。前節で取り上げた『ほしのこえ』『雲のむこう、約束の場所』『星を追う子ども』といった作品においては、「記憶」は思い出すことで男女の間に存在する「距離」が生み出す孤独や喪失感を受け入れ、乗り越えるためのものであった。例えば、『ほしのこえ』では、少し未来の美加子が「大人になるためには、痛みが必要なの」というメッセージで現在の美加子を励ます。

喪失感を受け入れ、肯定するメッセージは『雲のむこう、約束の場所』でも登場する。物語の終盤、記憶を無くして目覚めた佐由理に対して、浩紀は「大丈夫だよ。目が覚めたんだから。これから全部、また。お帰り、サユリ」という声をかける。『星を追う子ども』でもそれは同様である。シュンを、あるいは過去に父親を失ったことを受け入れられず、シュンの記憶を頼りにアガルタに導かれたアスナだったが、旅を経て本当は死者の蘇生を望んでいなかったことに気づく。そして彼らの死を正面から受け入れることで成長する。

前期の作品に共通するのが記憶をトリガーとして喪失を受け入れ、それによって成長するというプロットである。そうした側面は『君の名は。』や『すずめの戸締まり』などにも受け継がれる一方で、後期の作品では「記憶」の役割は個人の喪失の克服以上のものへと変わってゆく。『君の名は。』や『すずめの戸締まり』で描かれるのは、「記憶」をなくした社会の歪さ、社会として「記憶」を受け継ぐことの大切さである。前者では宮水神社の伝承が時間とともに形骸化し、儀式だけが形として残される。後者では関東大震災の記録が黒く塗りつぶされ、東京の後ろ戸の位置は閉じ師にさえわからなくなる。実際、東京の後ろ戸の上には巨大な駅が作られ、後ろ戸にたどり着くことさえ困難となってしまう。

『君の名は。』では、伝承を残すことが災害を防ぐきっかけになったが、『すずめの戸締まり』における「記憶」は、防災における実利的な意義以上のものを持つ。東日本大震災で母を失ったすずめが、喪失の記憶を黒塗りし、向き合わなかったことがきっかけで、東北の後ろ戸は開く。そして震災で失われた命から目を背けず、正面から受け入れることで扉は閉まる。これは前期作品で見られた「喪失を受け入れることで、成長する」というプロットの延長にあり、社会自体が喪失から目を背けないこと、出来事をきちんと記憶することの重要性を示唆する。また国民的作家になりつつある新海誠が、これまで日本のポップカルチャーの本流で語られてこなかった東日本大震災を正面から描いたことは、メタ的に作品のメッセージを体現していると言える。

また、『天気の子』では「記憶」は社会と個人の距離の克服の助けとなる。陽菜にもらったハンバーガの記憶が、仕事や居場所を見つける活力を帆高に与える。現代社会において働くことは個人が社会と交流し、結びつくための重要な手段である。仕事も身分も持たない帆高にとっては、こうしたなんでもない1つの「記憶」が、社会を自らを結びつけ直すきっかけとなったのだ。

「忘却」について

後期として挙げた3作品は、「記憶」の物語であると同時に現代の「忘却」を描いた物語でもある。例えば、『君の名は。』では主人公の瀧はたった3年前に発生した、500人以上の被害者を出したティアマト彗星の落下を忘れてしまう。

『天気の子』ではこれまで美しさの象徴のように描いてきた東京・新宿のある種暗い部分を描く。そこでは、どぎついネオンの繁華街、売春、身寄りのない

人々、ラブホテル街といった、見て見ぬふりをされるが確かに存在する人々の生活がある。

『すずめの戸締まり』は、そうした「忘却」に対する警鐘を最も明示的な形で描く。印象的なのは草太の友人・芹澤が、家屋が津波で流され、辺り一体が野原になった東北の風景を見て「この辺ってこんな綺麗な場所だったんだな」と言うシーンである。私を含め直接被災を経験していない人間にとっては悪意のない、ごく自然な感想である。しかし、直接被災したすずめにとってその景色はあったはずの様々な「記憶」が失われた場所であり、思わず芹澤に「ここが綺麗？」と驚いた顔で問いかけるのだ。

このシーンが示唆するのは、第1章でも書いた「日本人の忘れっぽさ」という課題である。直接被災を経験していない大多数の日本人にとって復興は単に日常を取り戻すことであり、言葉を選ばずに言えば、それは過去の辛い経験や記憶をなかったことにすることである。

後期作品で一貫して語られるのは都合の悪い存在、辛い記憶、経済合理性の外にある物事を「忘却」することへの警鐘でもあるのだ。

4.おわりに

本稿では、新海誠作品における「距離」や「記憶」というテーマがどのように描かれてきたかについて事実を整理し、そこから得られる示唆について考察してきた。彼の描く届きそうで届かない距離が、世代を超えて私たちを引きつける理由は、一貫して描いてきた「距離」の生み出す孤独や、「忘却」してしまうことへの言葉にならない違和感や恐れのようなものが世代や国境を超えた普遍的な問題であり、それをうまくすくい取ってエンターテインメントの王道のようなフォーマットに落とし込んでいるからだろう。また彼の作品が「キャッチャー・イン・ザ・ライ」を始め、「万葉集」、「古事記」など下敷きにしていることは、こうした人と人のすれ違い、「距離」の生み出す喪失といったテーマが数千年前から語られてきた人間の本質的な特徴であることを示唆する。その意味で彼の作品の重要なテーマを整理し、その変遷について考えることは意義あることではないだろうか。

i 新海誠『新海誠本』

ii <https://animeanime.jp/article/2016/09/02/30305.html>

iii <https://mantan-web.jp/article/20200302dog00m200037000c.html>